

8-4			
主題	認知症対応型通所介護における家族会の役割と地域との連携		
副題	家族会を通して実現した家族同士の絆と利用者の笑顔		
キーワード1	家族会	キーワード2	なし
		研究(実践)期間	24ヶ月

法人名	社会福祉法人 同胞互助会		
事業所名	昭島市高齢者在宅サービスセンター愛全園		
発表者(職種)	加藤博臣(介護職員)		
共同研究(実践)者	國井利幸(生活相談員)		

電話	042-541-8011	FAX	042-545-8012
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人同胞互助会を母体とする特別養護老人ホーム愛全園に併設されているデイサービスです。医療、栄養、機能訓練が充実しており、広い敷地が特徴です。また多種多様なクラブ活動も人気があります。定員は通所デイ(予防、一般)30名(土曜のみ15名)認知症対応型デイ36名(土曜のみ24名)です。
------------------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

平成6年のデイサービスセンター立ち上げから2年後の平成8年に家族会が発足する。当初の家族会の主な活動は、懇談会や食事会の実施。医療、食事に関する勉強会、そして「歩こう会」(家族と利用者が共に歩行をする場)の開催などであった。また、家族会は、常にデイサービスと地域とのパイプとしての役割を担ってきた。また年に一度のフリーマーケットの売り上げを年間の活動費とすることで、家族が気楽に参加できる点は最大の特徴である。しかし、その反面、しっかりとした仕組みがなく、時代の流れとともに会の在り方も変化していき、活動が縮小されていった。デイサービス側の協力体制も不十分であり、職員との連携が乏しくなっていた。平成25年の組織体制の変更に伴い、新しいセンター長が就任したタイミングで家族会から最初に出た課題は、存続が厳しいという話であった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

目的 1.事業所が家族会をサポートし、家族間のセ

ルフヘルプ機能を強化させることにより、家族会が主体性を持ち、利用者のケアの質を向上させる。

仮説 1.職員の関わり方いかんにより、家族会がもっと活気付くのではないかと家族会が元気になっていけば、家族が元気になり、結果、利用者も元気になるのではないかと

目的 2.認知症対応型通所介護事業所として、認知症高齢者を地域で支えていくための活動を定期的に行なう。

仮説 2.家族会の役割により、認知症の方を介護する家族同士の絆を深め、ご利用者、その家族、そして地域が参加するイベント等を通して、ご利用者の笑顔、ご家族の自信の向上、地域の介護に悩む方達への安心感につなげる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

1. 家族会と定期的なミーティングを行い、どのような家族支援ができたか、また、どんな課題があったかなどの事例を聞き取り、問題点

や改善点を把握する。

2. 家族会に参加する職員の人数を確保できるような勤務体制の見直しを行う。
3. 認知症高齢者の家族に対する精神的サポートを行う。
4. 『利用者が心地よく笑顔になれる場所』を事業目標とし、家族もその目標に参加して頂く仕組みを作る。
5. 毎回の親睦会の際に行なう認知症の方への介護方法の相談に加えて、医療、介護に関する学習会を開催。
6. 地域活動として、フリーマーケットの開催や地域ボランティアの協力を得たお楽しみ会の実施。

家族会の年間計画

- 4月 家族会総会と親睦会（介護方法の相談・助言）
- 5月 地域の方、家族会、利用者も出店するフリーマーケットの開催、地域の方たちを対象とした介護相談や脳機能訓練の紹介
- 6月 お楽しみ会（各種行事）と親睦会（介護方法の相談・助言）
- 9月 食事会
- 12月 年末お楽しみ会（各種行事）と親睦会（介護方法の相談・助言）
- 3月 役員選出、親睦会（介護方法の相談・助言）

《4. 取り組みの結果》

1. 家族会役員の意欲的な取り組みで、地域のボランティアによる歌やダンスの披露、演劇鑑賞会も実施され利用者と家族が共に参加される場が出来、楽しみと癒しの機会になった。
2. フリーマーケットの開催により、地域の方達にも参加して頂くことで、通所介護施設の紹介となった。また、お越し頂いた方達に活動の内容を体験して頂くことで、介護に対する安心感も伝えることができた。
3. 認知症の利用者を介護されているご家族同士のセルフヘルプ機能を果たすことができたことで家族の笑顔、利用者の笑顔を引き出すことができた。

4. 介護や認知症に関する学習を通して、在宅介護のケアの質の向上が確認できた。

《5. 考察、まとめ》

家族会の設置の意味合いは大きく、ご家族に安心感を与えること、職員が良く連携を図ることで信頼される施設になること。ご家族の表情にも変化があり、元気になることで在宅でのケアにも良い効果があること。地域の方達に発信するために家族会が不可欠であることを考えることができた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しない事、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

1. 認知症の人と家族を支える地域づくりの手引書（東京都福祉保健局 平成 22 年 3 月）
2. A 市における「認知症を理解し地域で支える会」の取り組みに関する研究-認知症高齢者の家族と医療・福祉職、地域社会が会に参加する意味-（大阪医科大学看護研究雑誌第 5 巻 2015.3）
3. 介護家族をささえる-認知症家族会の取り組みに学ぶ（中央法規出版）

《8. 提案と発信》

家族会の活動支援は、職員の負担が増えるだけでは？と考えてしまうのではなく、家族会と共に協力し課題を見つけ、目標に向かって取り組むことで、家族同士のコミュニケーションの場を定期的に提供することが出来ました。認知症対応型通所介護の役割をどのように地域に発信していくか…その具体的な取り組みについて試行錯誤していた私達にとって認知症高齢者を支援することは、その家族も支援することであると、改めて認識することができました。家族会に活気が出たことで、家族が元気になり、結果的には利用者の笑顔が増えました。今後はより一層地域に開かれた事業所となることを目指します。この機会に是非、家族会の存在価値を高く評価して頂ければ幸いです。